

世界の子どもたち

本シリーズは、フォトグラファー中西あゆみさんが
「世界の子どもの生活とあそびの今」をタイムリーにレポートします。

写真・文 中西あゆみ

ストリート



インドネシア

ちょうど一年前、昨年のラマダン（断食月）のことをご紹介しました。イスラム教信者が毎年行うこの一大イベント。恵みに感謝し、自身を悔い改める一ヶ月間は、日の出から日の入りまで一切の飲食を絶ち、禁欲に励みます。

この時期、メインストリートの道路沿いに置かれたゴミ箱のなかに人が入り、「恵まれている人々」からの「慈悲」を待つ「恵まれない人々」がいるという話を以前書きました。数メートルおきに置かれた大きなゴミ箱に体をうずめ、頭だけを出して「寄付」が届くのを待つ人たち。横には、子どもを抱く女性や老人の姿もあります。寄付する人たちは、そのゴミ箱を目印に食べ物やお金届けて回ります。真夜中の2時半ごろ、道路は賑わい「寄付渋滞」します。ラマダン中にだけ見られる、ある意味異様な光景です。

去年は、大人の男性が入っている姿を多く見かけました。今年はもっと早い時間帯から、子どもをゴミ箱に入れて寄付を待っている人たちを見かけることになりました。

妊娠の母親は、夫とともに一人の幼い子どもを押し車式ゴミ箱のなかに入れてあやしています。なかには、



1



3



2

1. 幼い子ども二人をゴミ箱に入れ、歩道で物乞いをする妊婦の母親とその横にかがむ父親。ラマダン時期の南ジャカルタ。

2. ローカル線の小型バスに乗り込み、乗客から物乞いをする少女。東ジャカルタ。3. 夜になんて渋滞がやむことはない。中央ジャカルタ。

一家が集めたりサイクル可能な資源ゴミが入っています。日中はゴミ収集。夕方にストリートに立ちます。

車通りが激しい通りの歩道沿いで、排気ガスの空気が重くのしかかります。家族は、ときどき赤ちゃんと哺乳瓶で飲み物をあげたりしながら、ただひたすら、誰かが立ち止まって何かを恵んでくれるのをずっと、何時間も待つていました。

空前の建設ラッシュを迎えていたジャカルタでは、富裕層向けのマンションや、巨大高級ショッピングセンターがどんどんつくられています。徒歩圏内に同じようなモールが建設され、一体誰が買い物をするんだろうと不思議になるほどです。中央ジャカルタでは、東西を横断するモノレールも現在建設されています。その代わり、下町の蚤の市や手づくりのアート画廊街などが潰されてしまう傾向にあります。都会の中心地から庶民の居場所が減少しているのです。市場街には、自然とストリートキッズが多く集まっています。ストリートで働く大人に交じったり、その姿を眺めたりしながら一日を過ごします。ここでは、邪魔者にはされません。

東ジャカルタ。真上に東西をつなぐ高速道路が走っている大通りは、車の流れが速く交通量があります。その道真んなかにいきなり飛び出して両手を広げ、車を止める裸足の少女。同世代の女の子と一緒に、ローカルのバスに乗り込み、乗客から物乞いをしていました。近くで果物を売って生計を立てている親たちを少しでも手助けするため、二人も一日働いています。こんな危険を冒していても、止める大人はいません。

両親たちの店はメインストリートの脇に無理矢理つくられた簡易果物市場。いくつもの店が並んでいます。いつ警察が来て店を壊されてしまうかわからず、びくびくしながら商売を続けています。家賃の高い市内には住むことができず、郊外から毎日ここに通っています。

車が通ることができない細い路地を一本入ると、庶民の暮らしがあります。小さなストリートが迷路のように入り組んでずっと奥まで続いています。大通りと裏通り。道の大きさに比例するよう、「格差社会」が映し出されている現実が、ここにはあります。



©Sameer Al-Abdullah

中西あゆみ

フォトグラファー

東京出身。米国でフォトジャーナリズムを学ぶ。2010年よりインドネシアのジャカルタを拠点に活動。現在ドキュメンタリー映画を作制作中。



4



6



5

4. 大通りにいきなり飛び出し、走って来る車を止める幼い少女たち。これからローカル線のバスに乗り込み物乞いをする。東ジャカルタ。5. ストリートでメタルを切る職人の様子を見つめるストリートキッズ。北ジャカルタの蚤の市通り。6. 葉っぱをつなげて髪飾りをつくる少女たち。南ジャカルタの路地裏にある通り。